

大須梵天車（ぼんてんぐるま）の歴史～都市の祭礼と近代以降の神社氏子に関して

名古屋民俗研究会例会 2024年7月31日

寺西功一

大須梵天車概説

大須商店街にある山車、梵天車が 2021 年 11 月 3 日に 11 年ぶりに陽の目をみることになりました。2002 年（その前は 1996 年）の富士浅間神社の祭礼を最後にながらくしまわれてわれたままとなっていたのを 2010 年名古屋開府 400 年を記念して大須大道町人祭りに曳きだしたものその後また深い眠りについておりました。

もと大須本通商店街振興組合が所有していた山車である。昭和 25 年頃に戦後再建し、おもに富士浅間神社の祭礼（6 月 10・11 日）に曳き出されていた。上山は 2 層の傘を有する「傘鉾」でありながら外輪式の名古屋型の山車の形式を折衷した特異な姿である。高覧手摺支輪などは朱塗り金箔を施し、戦災で焼失した「陵王車」のデザインを踏襲したものとなつており小陵王の別名もうなづける姿を今に伝えている。

梵天車とは

天王信仰と関係すると思われるが、棒状の先に剣、幣、箱などをとりつけた小型の山車で、名古屋では江戸時代中期頃よりに何度も流行したと伝えられ、各町より出された記録が残る（高力猿猴庵著『続梵天錦』、伊勢門水著『なごやまつり』、p.322、明治 43 年）

門前町誌（牧野市太郎著、明治 34 年）によれば

明治二十年の頃、祭車土蔵中の不用物を売却したる事あり。その時、上区内二、三の有志者前代の陵王及び、梵天車等を買入れ置きしが（梵天車は昔、迎車〔むかえぐるま〕に用いしものなりとぞ）四、五年の後これを修復し傘鉾となして小陵王の車と称え、天王または浅間の祭礼等に曳き回して古の余香を樂めり

とある。

文中の上区とは門前町上区をさし、旧門前町一から四丁目あたりまでの区域である。これが現在の梵天車のはじまりを示す記述とされている。つまり山車収蔵庫にあった不要品の売却に際して、古い山車があったとみられ、それを 4・5 年たってからそれをもとに傘鉾をつくったとある。つまり明治 24 または 25 年頃に現在の梵天車の基礎ができたと考えられる。

ただしそれ以前にも梵天車はあったことは記述されており、これは迎車であったという

ことがわかる。迎車とはおそらく、若宮祭で那古野神社へ行った山車（陵王車など）が夕方になると提灯をつけて（現在の桜通り本町付近にて）町内へ戻るが、その際に門前町の氏子の人たちが迎えに行く際に使われたものであったと推察される。

このように江戸時代に名古屋城下に流行した梵天車を今に伝える貴重な遺産である。

明治後期以降には富士浅間神社の復興とともに、梵天車は、その祭礼に曳きだされるようになる（明治 30 年以降）、そして小型であることから子どもたちの曳く山車として親しまれていく。

（富士浅間神社誌、昭和 7 年、巻頭写真）

若宮祭と陵王車との関係

名古屋総鎮守として知られる若宮八幡社（中区栄 3 鎮座）の祭礼、若宮祭には門前町より陵王車という山車が出されていた。この山車のデザインなどを梵天車が引き継いでいる。はじめは延宝 2 年(1674)に傘鉾を出し、その後、鶴の車となり、元禄年頃に大神楽車などの変遷があり、明和 5 年(1768)に陵王車となり、天保 5 年(1834)には改造されて充実をはかつたが、これが戦災焼失した陵王車の山車である。

現在そのお囃子の一部が伝えられている（帰り囃子「開化」）。

富士浅間神社誌（昭和 7 年）によれば、陵王車は、富士浅間神社境内の北側にあった宝庫に収蔵されていたと記述がある。また昭和 12 年 5 月 14 日の朝日新聞の記事には、大須観音通（当時は浅間通り）から本町通りに出たすぐのところで陵王車の飾り付け（組み立て）の様子を写した写真がある。

門前町と富士浅間神社

富士浅間神社の歴史

明応 4 年（1495）後土御門天皇の勅により創建された伝えられる。江戸時代はじめ富士山観音寺清寿院がおかげで、その境内の神社となる。清寿院は修驗宗当山派（醍醐寺三宝院）の尾張の中心的寺院として栄えるが、明治初年に神仏分離・廃仏毀釈の影響により 廃寺となつたが富士浅間神社は残る。もとの清寿院の境内は明治 12 年(1879)の愛知県初の公園「浪越公園」（なごや／なみこし）となつた。

氏子としての門前町（現在の大須 2・3 丁目の一部）

江戸時代から門前町の一部に寺子（もと清寿院の土地を使用する借地人）がいたため、明治後半に氏子としての自覺的な動きが見られるようになる。

もともと富士浅間神社は直接の氏子を持っていなかつた。本来、門前町全域（一丁目から八丁目まで）は若宮八幡社の氏子区域とされていたが、そのなかでも近接した上区の人々

からの信仰をあつめることになる。

明治 16 年、門前町内で内紛が生じ、町内の組織を南北に分割することになる。北を上区、南を下区に分離して町内運営がされていく。そのため前述の陵王車の運営も上下両区による隔年の当番となった。

そのとき門前町一丁目から四丁目一部まで（本町通り西は浅間通り〔現・大須観音通〕、東は樅の木横丁〔万松寺通り〕まで）が上区となり梵天車を担う町内として確立される。

明治 30 年 6 月 1 日臨時町会決議録によれば、

浅間神社並ヒニ湊川神社ニ限リ門前町上区内ニ本籍ヲ定メ住居スル者ハ両神社信徒総代ヲ選挙スルノ權ヲ有ス

被選挙權ハ當上区内ニ本籍ヲ定メ不動産ヲ所有スルモノニ限ル

任期ハ式ヶ年トス

信徒総代ハ二名トス

信徒総代ハ若宮神社氏子総代ト協議ノ上事務取り扱フヘキ事（後略）

とある。

その後、昭和 15 年に全国的に町内会の再整備が行われることとなり、上区からさらに 2 つの町内会が発足する。門前町一、二丁目にあたる「門前町上区町内会」、三、四丁目（一部）からなる「門前町上区下町内会」である。

後者の門前町上区下町内会は、戦後になると商店街としての組織拡充をはかり「大須本通発展会（振興会）」となる。大須本通（おおすほんどおり）とはまさに大須の幹線（本通り）である本町通りに店を構えているという氣概を示す言葉である。

戦後の様相

梵天車も陵王車とともに昭和 20 年 3 月の空襲で焼失したと考えられる。当時、陵王車の収蔵庫は富士浅間神社境内北側にあり、梵天車も同様に保管されていたと思われる。

現在の梵天車に部材の箱書きに昭和 29 年の墨書があるものがある。また摺り鉢の刻印には「昭和二十九年六月十一日 鍋吉 大須本通り振興会」桑名にあった鍋吉鑄造所に作られたとある。その頃には復興がされたようだ。

お囃子は子どもたちを中心となって、おおむね桑名の石取囃子と同じである。石取祭研究者である水谷重亮氏によると「七ツ拍子」と呼ばれるもので、明治 20~30 年代に広く伝播したとのことで、明治以降の梵天車の活動時期を考えると導入された時期が推定されるであろう。

昭和 38 年から昭和 40 年頃には全体に改修がされ、彫刻等がほどこされて、とりわけ菊の彫刻は現在の名古屋城の金鯱の木型制作をした早瀬景雲（尾張藩御用彫物師・早瀬長兵衛の子孫）によるもので文化財として永久に残すようにと収納箱の箱書きにある。

河野重助（こうの・じゅうすけ）と河野与助（こうの・よすけ）

梵天車には町内在住の河野家の人々が大きく関わっている。河野重助（三代）は、明治5年生まれ（昭和44年歿）で、布団などの綿加工をする河野綿店の主人。富士浅間神社への信仰が篤く、大正時代の社殿造営や運営に多大な功績があった。そのため境内に胸像が建てられている。その長男である重平（四代の重助、明治35年生まれ平成10年頃歿）も父同様に、大須への愛着が深く梵天車の再建に寄与。

その分家になる河野与助（明治生まれ。昭和60年前後歿）は、布団の小売商として明治時代から町内にあり、ご子息の話では陵王車では人形方を務めていたという。梵天車の再建にあたって、実務的に構造などの指示をしたようだ（嫡孫の談）

さいごに

江戸時代の名古屋の山車文化を継承し、いまで大須という地域にあって奇跡的に残されてきた貴重な財産である。とくにここ数年は大須学区、大須商店街の協力もあって復興の道筋が開かれた。各時代の影響を受けながらも、大須という地域にあることが様々な文化をとりこむことができる背景となって完成された山車である。